

まえがき

戦後日本の医療は諸外国の医学技術を取り入れ大きな発展を遂げました。抗生物質の普及や衛生面の整備が進み、感染症で亡くなる人は激減しました。また、全国に国民皆保険制度が行き渡り誰もが適切な医療を受けられるようになりました。

このような急速な日本の医学・医療の発展は国民の健康を守るといふ観点からみても世界でトップクラスであることは間違いありません。

しかし、医学・医療の発展とは裏腹に粗食な時代にはあまりみられなかったがんや糖尿病、高血圧症などの治りにくい病気の急増が大きな問題になっています。

社会的な背景はあるものの、急増している不妊症も治りにくい症状の一つだと思えます。

1949年、今から約70年前に日本で初めて非配偶者間の人工授精が成功しました。

誰もがこの方法を使えば赤ちゃんを授かることができると歓喜したことでしょう。

しかし、約70年たった今、高度生殖補助医療がこれだけ発展したにもかかわらず依然として不妊に悩

むカップルは増加しています。

2010年の日本産科婦人科学会の統計によれば26歳で不妊治療（総治療）を受けた女性の約42%が妊娠、39歳では28%と妊娠率は年齢とともに下降していきます。

妊娠率の低下の大きな要因としていわれているのが晩婚や晩産化による妊孕性（妊孕する力）の低下によるものです。

妊孕性低下の最大の問題点は年齢による「卵子のグレード」です。

30歳を過ぎると卵子の老化は徐々に進み妊孕性の低下に拍車をかけます。

婦人科や不妊外来では、カップルの検査から始まりタイミング法の指導、顕微授精に至るまで、その方のもっともベターだと思われる治療が専門ドクターの方針によって決められ行われます。

お薬の処方から妊娠を阻害する手術、ステップアップはこうすればこうなつてこういう結果が出るという理論から成り立っています。しかし、悲しいかな現代の高度生殖補助医療をもつても卵子を若返らせることはできません。

では、どうすれば妊孕性を上げて赤ちゃんを抱くことができるのか？

私が不妊鍼灸を初めて最初に来院された30歳代の患者さんのことです。彼女は不妊歴3年で卵巣の機能低下や卵管閉塞、子宮筋腫の手術を経験されて身も心もボロボロで妊娠は諦めているけれど最後の頼みの綱として来院しました。

正直なところ、患者さんでさまざまな症状があるのではたして希望をかなえることができるのかと困惑しました。

彼女が通院し始めてから2カ月ぐらいいのとき、施術前にいつになく笑みがこぼれなんとなく身体の調子がいいとお話をいただきました。

施術を始めてから8カ月、彼女から「妊娠しました、奇跡です」と連絡がありました。これが、私の初めての成功例でした。卵子のグレードが悪くても、卵巣機能の低下があっても、その方の以前から患っているさまざまな症状を鍼灸や食生活、呼吸法で改善することで、身体が妊娠できる状態になり、やがて妊娠するという実証でした。

妊娠はホルモンのバランスや卵巣機能の状態、内膜の厚み、パートナーに問題がないかなど一定の条件を満たさなければ成立しません。その部分においては、薬物療法でクリアすることができますが、残念ながら妊娠できるからだづくりは薬物療法ではできません。

妊娠とは、まだ解明されていない分野もあり神の領域として神秘性を秘めています。

その領域に挑戦するのが不妊鍼灸なのです。顕微授精は卵子にパートナーの遺伝子を注入し子宮に戻します。不妊で悩まれている方が顕微授精の技術を見たら「これなら授かる」と思うでしょう。しかし、統計的な着床率は30代で25〜30%ほどです。

私の治療院にご相談に見えた患者さんで数年間不妊治療を行い人工授精10回、体外受精5回の経験をもった方もいらっしゃいます。そのような方は元々「妊娠しにくい体質」をもっていますから薬物療法やステップアップの他に選択肢をもつべきだと思います。その一つが不妊鍼灸なのです。私の施術データの中で2年〜3年間不妊治療をしても妊娠しなかった35歳までの方に鍼灸施術や栄養指導、呼吸法の改善を促した結果、着床率は60%以上になりました。

この事実是不妊患者さんに鍼灸や生活指導をすることで「妊娠体調」が上昇しやがて妊娠に至ったことを物語っています。

妊活をどう始め進めていくのか、また、不妊で悩んでいる方や不妊鍼灸自体を知らずにいて、子宝に恵まれようとするせつかくのチャンスを逃してしまうことが切なくて私はこの本を書き記しました。これからでも遅くはありません。どうしても子供を授かりたいと思っっている方がこの本を手にとって

できれば幸いです。私の想いは東洋医学の神髄でもある鍼灸を駆使し不妊に悩む方が一日でも早く健康的な妊娠をされ、家族に見守られて笑顔で赤ちゃんを抱いた姿を見ることです。

金子 弘喜